

探究的な読みを引き出す試み ～読み比べから『形』の魅力を見つける～

Trial to inquiry based readings

～Discover the appeal of 『Katachi』 by reading and comparing～

戸谷 順子
Toya Sumiko

要 旨

菊池寛の短編小説『形』を読むにあたり、その元となった作品(原典)と読み比べることで、『形』という作品の魅力に迫っていくことをねらいとした授業実践である。この作品は中学2年生にとって時代設定や表現など難しいところもあるため、個人で読みを深めつつ、話し合い活動を通して仲間同士(学習班)で探究的な読みを深める活動も取り入れた。また、班の仲間とで深めた読みを、作成したスライドを用いて発表することで発表者として、また作品の読み手として、主体的に学ぶ場を設けた。単元の最後には改めて『形』という作品の魅力について生徒一人ひとりが思考を深める課題を設定した。

キーワード : 読み比べ 話し合い活動 探究的な読み スライド作り

I はじめに

元になった作品があり、その作品を後世の高名な作家が再構成・リメイクしたものが教科書に載ることがある。中学で学習する文学作品では『走れメロス』や『高瀬舟』が、高校では『羅生門』や『地獄変』などがある。菊池寛の小説『形』にも元となった作品(『常山紀談』江戸時代の儒学者、湯浅常山による著作。本稿では以下、「原典」とする)があり、それも読んでみることで、菊池寛の工夫、作品の構成(の変化)、何を主題にするかなど、『形』を読むだけでは分からなかったことにも生徒が気づくのではないかと考えた。

『形』は中学3年の教科書に掲載されていたこともあるが、現行の光村図書の教科書では2年に掲載されている。中学2年生でもこの作品を読み味わう方法として、話し合い活動を加えつつ、本校で推進しているICT活用との両立を目指し、この実践を行った。

II 授業の実際

1. 単元名 : 「『形』の魅力を熱く語れ！」 教材名 : 菊池寛『形』

2. 単元の目標

- (1) 現代語訳や語注などを手掛かりに作品を読むことを通して、作品に表れたものの見方や考え方を知ることができる。 [知識及び技能] 2年(3)イ
- (2) 観点を明確にして文章を比較するなどし、文章の構成や論理の展開、表現の効果について考えることができる。 [思考力・判断力・表現力等] 2年C(1)エ
- (3) 作品の魅力について互いに考えを伝え合い、そこからさらに自らの読みを深めようとしている。 [主体的に学習に取り組む態度]
- (4) 言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を生活に役立て、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。 [学びに向かう力、人間性等]

3. 本単元における言語活動

原典と比較して読み、『形』の文章構成や表現の特徴について話し合い、作品の魅力を発表する。

4. 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・語注や現代語訳、国語辞典などを手掛かりに『形』とその原典を読むことを通して、作品に表れたものの見方や考え方を知る。(3)イ	・『形』とその原典とを読み、二つの作品の相違点を見だし、『形』の文章構成や表現の効果について考えている。(C)エ	・『形』の魅力について互いの考えを伝え合い、そこからさらに自らの読みを深めようとしている。

5. 単元設定の理由・教材観・指導の工夫

(1) 単元設定の理由

『形』は中学生にとっては時代背景が分かりにくい部分もある、あまり読み慣れないジャンルの作品と言えるだろう。しかし、場面を想像しやすい巧みな比喻と衝撃的な結末の小説を読むことで、生徒に読書に興味を持ってもらう契機としたいと考えた。本単元では原典と読み比べ、作品の文章構成や表現の特徴に気づかせ、作品の持つ魅力に迫っていきたいと考えている。

また、このような作品を読むことで、今まで出会ったことのない作家や作品と出会い、生徒自身の読書の幅を広げる契機としたいと考えている。

(2) 教材について

『形』は、見開きで収まるような短い作品でありながら、簡潔で緊迫感のある描写と衝撃的な結末で締めくくられる、インパクトのある作品である。本単元では『形』とその原典とを読み比べ、二つの作品の相違点を見だし、作品の構成や表現の特徴に注目することで、『形』という作品の魅力はどのようなところにあるのかを考えさせたい。

(3) 指導の工夫

- ・『形』とその原典を読み比べ、二つの作品の相違点を見だし、『形』の文章構成や表現の効果に気づかせる。
- ・二つの作品の相違点を学習班で話し合うことで、作者はなぜ原典からそのように書き換えたのか、作者の意図を考えさせる。
- ・作品のタイトルである「形」とは何か、まず初読の時点で考え、学習のまとめとして再度「形」とは何かについて考えさせる。

6. 指導と評価の計画（全4時間）

時	主な学習活動	指導上の留意点・評価とその方法
1	①『形』を通読し、「形」とは何かを考える。 ②本文を読解する。	○語句調べをしながら、内容を理解する。 ○辞書に載っていない語句は授業者が補足する。 [評価] 本文の内容を理解し、形とは何かを考えている。 [思・判・表]
2	①『形』の原典『常山紀談』を読み、内容を理解する。 ②二つの作品を読み比べ、共通点を確認する。 ③二つの作品の相違点を見だし、学習班で共有する。	○『形』と『常山紀談』を読み、二つの作品の共通点を確認し、相違点を見いだす。 [評価] 『形』とその原典を読み比べ、相違点を見いだしている。 [思・判・表]
3	①前時に学習班で共有した二つの	○『形』の構成や表現の特徴から、作品を魅力的な小説に

	作品の相違点をもとに、『形』の構成や表現にはどのような特徴があるかを話し合う。 ②『形』を魅力的な小説に変えたのはどの部分であるかをスライドに入力する。	変えたのはどこかを話し合い、その内容をスライドに入力する。 [評価] 展開や表現の効果について根拠を明確にして考えている。 [思・判・表]
4	①学習班ごとに『形』の魅力を発表する。 ②「形」とは何かを再度考える。	○各班2分で発表を行う。 [評価] 形とは何か、自分の考えを深めている。 [態度]

Ⅲ 探究的な学びの場面

1. 『形』と原典との読み比べ

『形』には、元となった作品があることを生徒に伝え、ワークシート「松山新介の勇将中村新兵衛が事」(*1)本文を一人ひとりに配付した。まずは二つの作品の共通点を各自の[ワークシート1](A4版)に青ペンで記入する。共通点をクラス全体で確認した後、[ワークシート1]をB4版に拡大した[ワークシート2]を学習班に1枚ずつ配り、二つの作品の相違点を挙げるように指示した。その際、右の図1のように付箋を貼って、各自が気づいた相違点を班のメンバーに示すようにした。

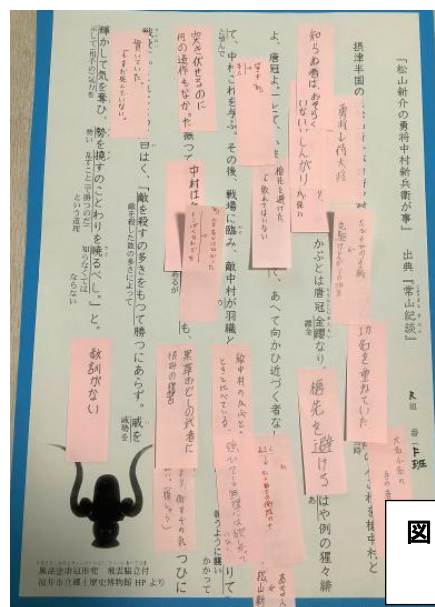
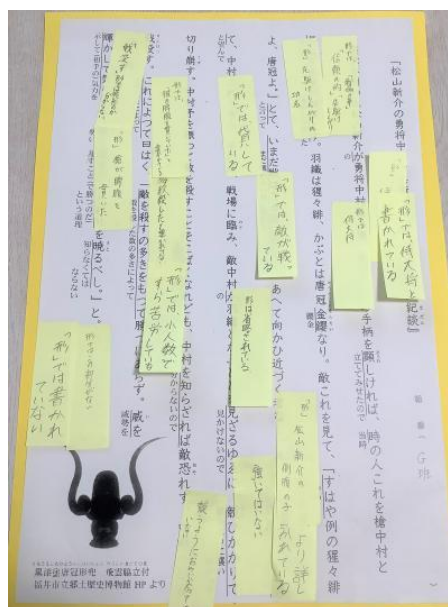


図1 学習班で付箋を貼ったワークシート2

以下に示したのが、学年の学習班全28班の指摘した相違点である。便宜的に原典本文を5つに分け、各学習班が指摘した部分に番号を付し、その内容といくつの班がその点を指摘したかを次に記す。

摂津半国の主松山新介が①勇将中村新兵衛、②たびたびの③手柄を顕しければ、④時の人これを槍中村と号して武者の⑤棟梁とす。⑥羽織は猩々緋、かぶとは唐冠金縷なり。

①『形』では「侍大将」となっている(14班)

②『形』では頻度について記載なし(1班)

③『形』では「先駆けしんがりの功名」と具体的に描写(17班)・「手柄」を「功名」としている(8班)

④『形』では「大名小名」と記す(7班)・人名をはっきりさせている(1班)

⑤『形』では「大豪の士」としている(7班)・「棟梁」としていない、具体的な立場はない(12班)

⑥『形』では槍について触れられていない(1班)

敵これを見て、「すはや例の猩々緋よ、唐冠よ。」とて、⑦いまだ戦はざる先に敗して、⑧あへて向かひ近づく者なし。

- ⑦『形』では勝敗について触れていない(4班)・「戦はざる先に敗して」としていない(6班)
敵は驚くものの敗れてはいない(4班)
- ⑧『形』では「槍先を避ける」となっている(8班)・「うろたえ血迷う」となっている(1班)

⑨ある人 ⑩強ひて所望して、中村これを⑪与ふ。⑫その後、⑬戦場に臨み、⑭敵中村が羽織とかぶとを見ざるゆゑに、⑮競ひかかりて切り崩す。

- ⑨『形』では主君の側腹の子、若侍と具体的な設定にしている(25班)
- ⑩『形』では「強ひて」ではなく、貸してほしいと頼み込んでいる(26班)
- ⑪『形』では貸すときに新兵衛が条件を出している(10班)・「快く」貸している(1班)
注：⑩と⑪を合わせて「貸す」としている班あり
- ⑫『形』では「明るる日」と具体的に記す(3班)
- ⑬『形』では「摂津平野の一角」と具体的に記す(1班)・「しのぎを削る」という描写あり(1班)
- ⑭『形』では羽織とかぶとを身につけた若侍がこの場にいる(22班)
原典には若武者の活躍が描かれていない(3班)
『形』では新兵衛が若武者の戦う様子を見ている(3班)
- ⑮『形』では「たけり立つ」としている(6班)・「復讐せんと」としている(6班)
『形』では新兵衛の「後悔」が描かれていない(2班)・若武者が一人で戦っている(1班)
「突き伏せる」という描写になっている(1班)・『形』では自陣に攻められていない(1班)

中村⑯矛を振つて敵を殺すこと⑰そこばくなれども、中村を知らざれば敵恐れず。中村つひに⑱戦没す。

- ⑯『形』では「十二分の力」「平素の二倍」と具体的に描写している(1班)
『形』では「槍の矛先」と描写している(1班)
- ⑰『形』では仕留めた敵の数が「二、三人」、倒した敵が多数であるという描写はない(22班)
新兵衛が敵を殺すシーンがない(6班)・若武者の活躍が描かれていない(1班)
- ⑱『形』では「脾腹を貫いて」とあり、新兵衛が死んだかどうかははっきりとは描かれていない(28班)

⑲これによつて曰はく、「敵を殺すの多きをもつて勝つにあらず。威を輝かして気を奪ひ、勢を撓すのことわりを曉るべし。」と。

- ⑲『形』には教訓(まとめ)にあたる、この部分がない(28班)

上記の結果から、「新兵衛が戦死したかどうかははっきりしない」点と「最後の教訓の部分がない」点を、全ての班が相違点として指摘したことが分かる。上記以外の相違点として「作品の題名が違う」(1班)、「新兵衛の心理描写がない」(2班)、「登場人物の台詞がない」(1班)というものもあった。題名が異なる点、登場人物の心理描写がない点、会話文がない点は2つの作品を読み比べながらほとんどの班が気づいていたはずであるが、指摘をした班が思いがけず少なかった。これは生徒が、『形』と原典を全く別の作品として捉えているため、敢えて指摘しなかったのではないかと考えられる。読み比べをする中で、皆が気づいているであろうことはわざわざ指摘しなくてもよい、「当たり前のこと」として捉えたのではないか。しかし、これらの点こそが、まさに菊池寛の施した重要な工夫であることは大変興味深い。

2 スライド作り

上で述べた、『形』と原典との比較読みを経て、『形』本文のどの部分が作品の魅力を生んでいるか話し合い、学習班で1枚のスライドを作成するよう指示した。(スライド作成には、Google スライドを使用した。) その際、「指摘した部分が本文にあることで〈こう読めるようになった〉〈こんな効果をあげている〉〈こんな小説になった〉を語れるようにしよう」と生徒に伝えた。

また、スライド作りと発表を行う際の条件として生徒には以下のように指示をした。

- 【スライド作り】**・スライドは班で1枚だけ作成する。発表の要点のみを示したスライドとする。
- ・授業の残り20分からChromebook(パソコン)の使用を可とする。
 - ・入力(メンバー複数で行うのではなく)1人だけが行う。

【発表】

- ・発表時間は各班2分間。与えられた時間を有効に使った発表にする。
- ・スライドには要点のみ示されているので、口頭で説明をしっかりと行う。
- ・全員が発表者となる。

これらの条件を示すことで、全員が発表者としての意識を持ち、話し合い活動に参加することを自覚させようとした。また、パソコンの使用時間と使用人数に制限を設けたのは、パソコン操作やスライド作りに没頭するあまり、話し合いに参加しない(話し合いの内容を十分に理解できない)生徒を生まないようにし、班全員で発表に取り組む状況と意識をつくるためである。

本校でも、各教科の授業や学級活動、委員会活動や部活動、学校行事などで ICT 機器活用の場面がかなり増えている。ICT 機器は大変便利ではある一方、対話の場面が減ってしまったり、目の前の機器に気が取られ、話し合い活動中にことばを発しない生徒がみられたり、話し合いが活発に行われなかったりすることがある。ICT 機器活用推進と、充実した話し合い活動の両立をさせるため、授業者が授業の中でパソコンを生徒に使用させるときは上記のような条件を示すようにしている。

そうすることで、どの班もよく意見を出し合って話し合い活動を進めることができおり、また、時間配分、役割分担をしっかりと相談しながら、効率よく協力して成果物(ここではスライド)を作成することができているように感じる。静かな教室に、生徒がタイピングをする音だけ聞こえるような授業時間せず、しっかりと話し合い活動の場を設けることを常に心がけるようにしている。

さて、全 28 班が発表で指摘した『形』の魅力は以下の通りである。()は、その箇所を指摘した班の数であり、その箇所がなぜ作品の魅力を生んだと考えるかを「→」の後に示した。生徒が作成したスライドの一部(図2)も次に載せた。

- ・本文中で用いられる「形」が何であるか、何を指すかを具体的に示さないところ。(6班)
→敢えて「形」が何かを示さないことで、読み手に考えさせる。
- ・新兵衛がかぶとなどを貸した人物を「若い士」と設定しているところ。(5班)
→新兵衛の感情を想像しやすくなり、読み手が新兵衛に感情移入しやすくなる。
- ・「手軽にかぶとや猩々緋を貸したことを、後悔するような感じが頭の中をかすめたときであった。」(4班)
→「後悔」という表現、後悔という気持ちを新兵衛に抱かせているところ。
- ・題名を『形』としたところ。(3班)
→題名を意識しながら作品を読み進めることになる。漢字一文字でインパクトがある。
- ・「自分の形だけすらこれほどの力を持っているということに、かなり大きい誇りを感じていた。」(2班)
→新兵衛の人間味が増す、新兵衛の後悔がひしひしと伝わってくる。
- ・「おどしの裏をかいいて脾腹を貫いていた。」(2班)
→原典にあった教訓をなくし、印象に残るクライマックスにして、何を伝えたいか読み手に考えさせる。
- ・「平素の二倍もの力をさえ振るった。」(1班)
→つまり、いつもは 1/2 の力で戦っていた。「形」のない新兵衛は本当は弱いことを巧みに伝えている。
- ・「ついついは御身様の猩々緋と唐冠のかぶとを貸してたらぬか。」(1班)
→この展開があることで内容が膨らんでいて、結末が原典と違ってみえる。
- ・「火のような猩々緋の服折を着て、～輝くばかりの鮮やかさをもっていた。」(1班)
→新兵衛の「形」を具体的に描き、読み手にイメージを持たせ、後半の伏線としている。
- ・「いつものように猩々緋の武者が～」の「いつものように」(1班)
→このことばがあることで、形さえ身につけていれば誰でも活躍できることを間接的に表現する。
- ・「こうして槍中村の猩々緋と唐冠のかぶとは、戦場の華であり敵に対する脅威であり味方にとっては信頼の的であった。」(1班)
→猩々緋、かぶとの価値と簡単にこの2つを渡したことがいかに大きな失敗だったかを表す。
- ・「そなたが、あの品々を身に着けるうえからは、我らほどの肝魂をもたいではかなわぬことぞ。」(1班)
→自分の力を過信している新兵衛が、後半で感情を大きく変化させていることが強調される。

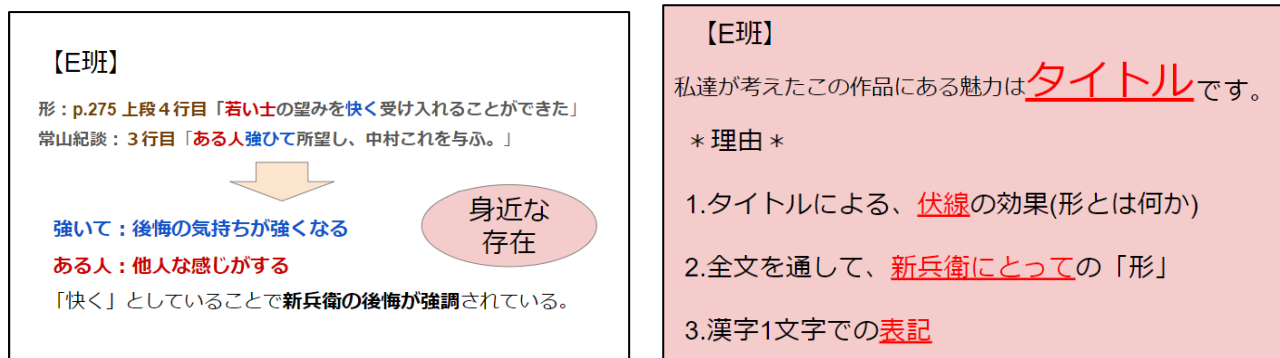


図2 生徒が作成したスライド

3 Moodleでの単元のまとめ

本単元のまとめ・最終課題として、〈A：作品を書いた菊池寛の意図・目的 B：『形』のここがすごい〉のいずれか1つを選び、自分の考えを100字以上200字以内でまとめ、Moodle上で提出させた。この課題に取り組むことで、学習班で話し合ったこと、他の学習班の発表を聞いてさらに考えたことを、生徒個人が再度考え、読みを深めることをねらいとした。

以下、A・Bそれぞれについて生徒の回答をいくつか紹介する。

〈A：作品を書いた菊池寛の意図・目的〉

- ・菊池寛が『形』を書いた意図・目的は、菊池寛が『常山紀談』を読んでもっと良い作品にしたかったからと考えました。『常山紀談』と比べて『形』は、人物の設定、新兵衛の生き様から分かることが違ってきます。『形』は『常山紀談』と比べて話が複雑化していますが、丁寧に話が進行し、新兵衛の心情の移り変わりが分かりやすく表現されています。このように菊池寛は常山紀談をより良くして、何より大切なのは形ではなく実力だよと訴えていると感じました。
- ・私は、『常山紀談』の終わり方が関係していると考えた。『常山紀談』では、物語の終わり方を要約すると、戦では威勢を示して相手の勢いを乱すことで勝てると書かれている。私の予想では、『常山紀談』を読んだ菊池寛が威勢、つまり形が重要なことは戦の中だけではなく普段の生活でもいえると考え、『形』ではあえて伝えたいことを隠し、形の大切さを読者に考えさせようとしていると思った。
- ・菊池寛が『常山紀談』を『形』として表した意図は、『常山紀談』に生き生きした表現を加え、話の内容を印象的にし、文章からの教訓を印象的にするためだと思う。『常山紀談』にある教訓が『形』にはない。私はこの文章を読んだ時、どのような意図や教訓から書かれたのか文になくとも自然に感じ取れた。そしてそれがとても印象に残ったのを覚えている。『形』はこの物語の教訓をより印象的にし、読者を引きつけるためだと思う。
- ・菊池寛は作品にもっと臨場感を持たせることを目的としていたと思う。「松山新介の勇将中村新兵衛が事」は、ナレーションが淡々と話を語っている。一方『形』は新兵衛の目線で書かれていることが多い。菊池寛は、読み手をもっと新兵衛の気持ちに寄り添い、猩々緋と唐冠のかぶとに心が揺さぶられている新兵衛の様子を感じてほしいと思ったのではないだろうか。
- ・菊池寛が『形』を書いたのは、人が見た目で物事を判断して損をしたり本来とは違う捉え方をしてしまったらということを経験したから伝えようと思ったからだと思います。新兵衛は派手な衣装からくる威圧感によって自分の実力以上の力を相手に示していました。大会やオリンピックで相手の肩書や戦績によって怖気づいて勝敗に影響を与えるなど、現代でも通ずるものを菊池寛は「形」を使って表現しています。
- ・『常山紀談』では、事実が並べられ最後にまとめがあるので場面の新兵衛の気持ちが想像しにくく、筆者の意見を一方的に受け取るだけで記憶に残りづらいです。だから『形』では、一つ一つの場面を詳しく書き、心情の変化を読み取りやすくし、あえて最後にまとめを書かないことで、読者が感じたことを素直に記憶できるようにしています。これが作者の意図・目的だと私は思いました。
- ・私は『常山紀談』と『形』を読み比べて、菊池寛は原作より新兵衛の力を下げているように感じた。原作では主題を明記しているが、『形』では書いていない。私はそこに作者の意図を感じた。『常山紀談』と

『形』はよく似た作品だが、主題は違うのだ。私の思う『形』の主題は「強さに自惚れると自分の行動を後悔し、失敗する」つまり「油断大敵」である。菊池寛が『形』を書いた目的はこの主題を読者に伝えるためだったのだと思う。

〈B：『形』のここがすごい〉

- ・『形』には『常山紀談』にはない新しい設定がされている部分がすごいと思う。それにより中村新兵衛の感情が書かれ、人物像がわかるようになり、読み手をさらに楽しませて考えさせられるような構成になっている。若武者のようにしっかりとした立場や関係などの設定を入れることで面白みが増している部分も多い。
- ・『形』で凄いと思ったところは、新兵衛の猩々緋と兜を松山新介の側腹の子に貸してしまったことへの後悔がよく表現されているところです。『常山紀談』では無理に欲しいと頼まれ猩々緋と兜を貸していますが『形』では快く貸しています。また『常山紀談』では出来事だけが書かれていますが『形』では新兵衛の心情も書かれています。これらによって『形』では新兵衛の後悔が良く伝わるようになっています。
- ・菊池寛が作った『形』の魅力は中村新兵衛が若武者に猩々緋の服折と唐冠纓金の兜を貸すということを付け足したことだ。『常山紀談』では何故貸したのが詳しく書かれておらず、なぜ新兵衛が自分の形をすんなり貸してしまったのか、モヤモヤが残っていた。しかし、『形』では誰もか納得するような形でまとめられて分かりやすくなっている。この要素を足すことで、若武者が討死した新兵衛を見て何を思うのかなどを考えることができる。
- ・『形』の魅力は題名の使い方だ。「形」が何なのかこの話の結末まで読まないといけない。読み手は物語を読み、もう一度題名を見ることでやっと「形」、そして物語の意味を理解することができる。つまり、菊池寛は『常山紀談』にあったまとめの部分をなくしたのではなく、漢字一文字の題名に込めているのだ。このように、「形」は重要な人名や地名では無いが、「形」があることで物語がより魅力的になっている。
- ・『形』のどこがすごいかを考えたときに思いついたのは、若い士の存在だった。勿論短い文章で新兵衛の人となりを読み手に伝えられるのもすごいと思う。しかし、私は若い士の活躍を描くことで「形」を失った新兵衛との対比を明確にすることや実体のない「形」がどれほどの力を発揮するのかという点が読み手に伝わりやすくなっているのではないかと思った。
- ・『形』のすごさは、元の作品よりもリアルで細かい描写にあると思います。若い士が新兵衛の武具を借りて来た場面では、二人の会話を明らかにしていることから、新兵衛がその士を思って申し出を快く受け入れたときと、戦場で苦戦したときとの心情の変化が明確になっていると思いました。また、戦いの場面では、二人の戦いぶりに比喻表現が多く用いられていて、読み手に実際にその場にいるかのような臨場感を与えていると感じました。

IV まとめ

本実践は、本校国語科の考える「探究的な学習と振り返り」（＊２）に即している。

○ぼんやり捉えた読みを「こういうことだ」と解釈して、価値付けしていく。

○言葉を使って解釈や評価や意味づけをしてより深い理解へとつなげていく。

という２点は、本単元の〈「形」とは何か〉という問いや、〈『形』の魅力を発表する〉活動にあたるものである。また、学習の中で生徒たちが行う振り返りには２つの面があるとして、

①言語活動の途中で一段落したときに、次の言語活動を調整していく振り返り（事中省察）

②単元の終わりに、学習全体を振り返り、学びの意味づけをしていく振り返り（事後省察）

も、それぞれ本単元では①はスライド作りと発表原稿作りに、②はMoodleでの最終課題にあたると考えられる。

本実践を行ってみた、授業者としての振り返りとしては、

○「形とは何か」という発問を、生徒に２度行ったこと

○本単元を４時間の設定としたこと

が挙げられる。「形とは何か」という発問を2度行ったことで、作品の最重要キーワードである「形」、そしてそれが作品のタイトルであることを生徒に意識させすぎたのではないだろうかという点である。この発問を初読すぐと、最終時にしたことで、本来ならば生徒から自発的に「形って何だろう」という気づきが生まれてもよいと思われるが、その部分が誘導的になってしまったのが反省点である。

また、単元を全4時間に設定したことは、『形』が短編であるとはいえ、生徒にとって読み慣れない時代小説であり、本校には帰国生もいるため、時代背景や作品中のことばで分かりにくいこともあったため、少し駆け足になったところがあった。また『形』は以前、3年生で扱う教材として授業を行ったことがあるが、2年1学期末(7月)に読んでいくにはもう少し本文読解に時間を割いても良かったのではないかと感じている。ただ、敢えて読解の部分で授業者が細かく説明をしない方法を取り、自分で読みを深めてもらいたかったという思いもある。

なお、本実践については『実践国語教育』第370号(※3)に〈「探究的な学び」につなげる授業づくりのポイント〉の視点から述べた拙稿が掲載されているので参照されたい。

最後に、本単元の実践にあたり、授業と同時期に本校図書室で「古典を題材にした小説」展示コーナーを学校司書の奥山先生に作っていただいた(図3)。奥山先生には、授業に関する資料の展示と貸し出しを日常的に、また継続的にご協力いただいている。関連書籍があり、展示コーナーを作っていただいたことを授業で生徒に紹介することで、図書室、また読書が身近なものと感じられる機会となっている。実際にこの展示コーナーで本を選び、借りていく生徒も何人もいたということである。この場を借りて、奥山先生にはお礼を申し上げたい。



図3 本校図書室での展示コーナー

【註】

- *1 「ワークシート1」「ワークシート2」、また本稿内で原典本文を示したものは全て『常山紀談』岩波文庫の本文から引用したものである。ただし、中学生にとって読みにくい漢字は適宜平仮名に改めた。また、このワークシート作成にあたっては東京書籍『新しい国語3』33頁を参照した。
- *2 「令和2年度 お茶の水女子大学附属中学校 教育研究協議会 Web 発表記録」23頁を参照されたい。
- *3 「『形』の魅力を見つけよう!」『実践国語』第370号 明治図書 30頁～32頁 2021年11月

【引用文献・参考文献】

- ・湯浅常山(原著)『戦国武将逸話集』(78～79頁)勉誠出版 2010年
- ・湯浅常山『常山紀談』岩波文庫 上巻(77～78頁)・下巻(186頁) 岩波書店 1988年
- ・『新しい国語3』東京書籍 33頁 平成23年検定教科書
- ・福井市郷土歴史博物館ホームページ <http://www.history.museum.city.fukui.fukui.jp/> (2021年6月7日情報取得)
- ・お茶の水女子大学附属中学校「令和2年度 お茶の水女子大学附属中学校 教育研究協議会 Web 発表記録」